

# 平成30年度 福島県立聴覚支援学校平校学校評価アンケートまとめ

【評価基準】 A:とても良い B:良い C:普通 D:悪い E:とても悪い

平校 No.1

	今年度の取り組み	評価者	評価					○ 取組の様子と考察 ■ 意見・感想等	
			A	B	C	D	E		
I-1 自立と社会参加に向けて	1 幼児児童の社会参加を目指し、幼児児童の実態に応じたことばの指導を充実させ、人とかかわり合うためのコミュニケーション能力を育成します。	保護者	56%	39%	5%			■一人一人丁寧に対応して、個に合ったかかわりをしている。 ○言葉ノートや絵日記等を用いた指導を継続して行っているため、評価が高い。今後もコミュニケーション能力を育成するため取り組みを充実し進める。	
		教職員	17%	83%					
	2 保護者との連携及び関係機関との連携の際には必ず「個別の教育支援計画」の記載事項を踏まえ、これまでの指導支援の経過や合理的配慮を確認し、幼児児童の実態に応じた指導・支援を実施します。	保護者	75%	25%				○保護者と合理的配慮について確認をし、学校生活において必要な配慮を行ってきた。また、関係機関とは教育支援計画をもとに連携を図るようにした。	
		教職員	7%	81%	12%				
	3 交流及び共同学習の一層の充実のために「個別の教育支援計画」を活用し、交流相手園・校と合理的配慮を共有することで、幼児児童同士が相互理解を深めて、主体的にかかわり合えるように支援します。	保護者	45%	45%	10%			○これまでの交流及び共同学習の流れを継承するとともに、さらなる発展を目指し取り組んだ。取組の話し合いや活動そのものは充実していたが、個別の教育支援計画を活用するという面において評価が低かった。 ■同じ年齢の子どもとたくさん関わってほしい。 ■学年に応じた交流授業や難聴理解の授業等もできた。	
		教職員	4%	40%	56%				
	I-2 主体的・対話的で深い学びと豊かな心の育成	1 複数の教員間、保護者、関係機関と連携し、必要に応じてケース会議を実施することで幼児児童の実体像を確認し、コミュニケーションの状況を明確にして、「個別の指導計画」を作成・活用しながら指導の充実を図ります。	保護者	56%	44%				○今年度も、「個別の指導計画」作成・見直しのケース会議を実施した。各教員が意見を積極的に出し合えることができ、幼児児童の実態把握が進み、教員による幼児児童の教育的ニーズの共有化がすすんだ。
			教職員	44%	56%				
		2 新学習指導要領を踏まえた授業の目的を明確にし話し合い活動や作文活動を取り入れ、幼児児童との対話を大切に授業づくりを行います。	保護者	63%	37%				○小学部は新学習指導要領の移行期間であるが、踏まえた授業の在り方という点において、まだ試行錯誤で取り組んでいる点がある。
教職員			31%	45%	24%				
3 体験的活動の充実を図り、体験したものを「読む」「きく」「話す」「書く」等のことばの学習を通して、幼児児童が自ら考え、行動できるような主体性や意欲を育成します。		保護者	55%	38%	7%			○幼稚部では、体験活動を中心に幼児の興味関心に寄り添って、絵、手話等を通したやりとりを大事に指導支援を行ってきた。また小学部においては、授業の中で獲得した言葉を他教科と関連させながら、言葉のネットワークを意識しながら指導支援に当たってきた。今後も継続して丁寧な指導支援を行っていく必要がある。	
		教職員	31%	54%	15%				

	今年度の取り組み	評価者	評価					○ 取組の様子と考察 ■ 意見・感想等		
			A	B	C	D	E			
I-3 言語力と自己指導能力の育成	1 聴覚活用と多様なコミュニケーション手段（手話を含めた）の研修を実施し、子どもの「きこえ」やコミュニケーションの実態に応じた指導・支援の充実を図ります。	保護者	56%	33%	11%			○地域支援部が担当し職員会議後に、ミニ手話研修会を実施した。季節の言葉や授業の中で使う言葉を中心に行ってきた。 ○今年度は療育センターから耳鼻科の主治医に来院していただき、授業参観や情報交換を実施し、幼児児童の「きこえ」の状態やその指導支援についてアドバイスを受ける機会を設定した。  ○補聴器や人工内耳の研修会を、メーカーの担当者を招聘して実施した。補使用上の留意事項や、効果等について確認し、指導に役立てることができた。 ■職員が研修を行い専門性を高める取組をしていることは、保護者や外部の方には分かりにくいので、HPなどで知らせ、子どもたちの授業時に還元できるようにする。  ○筑波大学附属聴覚特別支援学校や関連の先生方を3名、計4回講師として呼び出して研修を行い専門性を高めるために、授業研究会等に取り組んだ。		
		教職員	75%	25%						
	2 聴覚補償や情報保障機器の活用に関する研修を実施し、授業に活かします。	保護者	45%	55%	10%					
		教職員	44%	56%						
	3 外部の専門家を招聘し、教員自ら課題意識を持って授業研究会を実施し、授業力の向上を目指します。	保護者	56%	33%	11%					
		教職員	25%	57%	18%					
	II 安全で安心な学校づくり	1 教育活動が安全な環境で行われるように、校内外の安全点検等を行い、幼児児童の安全と安心の確保に努めます。	保護者	50%	50%					○毎月、安全点検を行っている。また、教職員には、日々の観察で破損等を見つけた折には速やかに報告するように徹底している。また、管理職は、事務員、用務員と連携し、速やかに対応・修繕をしている。  ○給食係が平支援学校の栄養士等と連絡を密にして給食実施に取り組んで来た。また、おかずや食材の名前などを掲示板を利用して幼児児童に知らせた。保護者に対しては、授業参観時に給食試食会を実施することで、理解ができている。  ○いじめが重大事案につながるまえに、できるだけ早く認知し取組を心がけた。また、保護者からの情報を大切にして、学校と家庭が連携の上取り組んだ。 ○生徒指導部が中心となって、いじめに対する研修会も行った。  ○年間計画に沿って避難訓練等は行ってきたが、放射線教育等の安全教育の点での取組の改善が必要と考える。 ○安全マニュアルの見直しも年度末までには行うようにする。 ■幼稚部の子には難しい内容であるが、訓練等は参加できた。
			教職員	50%	50%					
		2 食育指導とともに安全で楽しく充実した学校給食を実施します。	保護者	44%	56%					
教職員			44%	56%						
3 いじめに対する意識を高め、予防的な対応を心がけ、保護者と連携しながら組織的に幼児児童の心の状態を確認します。		保護者	33%	45%	22%					
		教職員	38%	50%	12%					
4 災害発生時の危険を予測し、防災教育や放射線教育を充実させます。		保護者	33%	56%	11%					
		教職員		63%	37%					

	今年度の取り組み	評価者	評価					○ 取組の様子と考察 ■ 意見・感想等
			A	B	C	D	E	
Ⅲ センター的機能の充実	1 地域の関係機関や保健師と連携し、乳幼児教育相談を中心とした早期からの教育相談の充実を図ります。	保護者	44%	44%	12%			○夏休み中に、いわき市内の地区保健センター及び広野町、楡葉町を訪問した。保健師、担当課長とお会いし、「みみらんどいわき」のパンフレットを渡して説明や地区内の聴覚障がい児等の情報交換等を行った。
		教職員	30%	70%				
	2 教育事務所、市町村教育委員会、地域の特別支援学校の地域支援部と連携し、地域のニーズに応じた学校等支援を充実させます。	保護者	30%	70%				○学校支援では、幼稚園、保育所、小中学校、高等学校等、地域の難聴学級や通常学級に在籍している難聴児の相談支援を継続的に行ってきた。教育課程や授業場面での指導、または、校内研修支援など支援も多岐にわたっていた。 ■地域支援と校内体制のスムーズな連携が必要。
		教職員	13%	69%	12%			
	3 地域における聴覚障がい教育の専門機関として、学習会や研修会の場を地域に提供します。	保護者	45%	22%	33%			○保護者や聴覚障がい者を育てているご両親向けの学習会や研修会を企画実施をした。
		教職員	13%	69%	12%			

